

〈研究・調査報告〉

2023年度国際文化研修（アジア次世代交流プログラム）報告 —オンラインによる事前・事後研修導入の試み—

王 岩

【要旨】

城西国際大学国際人文学部2023年度国際文化研修（アジア次世代交流プログラム）は、JASSO海外留学支援制度（協定派遣）2023年度プログラムとして採択となり、2024年3月に実施した。本研修において、海外派遣の前後に導入したオンラインによる事前・事後研修が、JASSOにより評価され、海外研修の好事例として、JASSOウェブサイトのコンテンツの中で公開され、紹介される運びとなった。また、参加学生から提出された留学前・留学後報告書からも本研修に対する満足度が高いことが分かった。一方、参加者の体調管理などについては若干の課題もあった。本稿では、研修プログラムの実施状況とオンラインによる事前・事後研修導入の効果、次年度のプログラム実施に向けての課題や改善案を示した。

キーワード：中国研修、協定校、オンライン研修、現地調査、ワークショップ

1. はじめに

本学の2023年度国際文化研修（アジア次世代交流プログラム）は、JASSO海外留学支援制度（協定派遣）の支援対象となる派遣プログラムである。本プログラムにおける8日以上30日以内の学生交流創成タイプ（タイプAという）の派遣プログラムの募集は2020年度で終了し、2021年度以降は、連続31日以上実施するプログラムのみが支援対象となるという制度の見直しがあった。具体的には、留学先において連続8日以上実施するものとし、「日本国内でのオンラインや学内外での学習活動を含む場合、8日以上派遣と当該学修期間を合算して31日以上1年以内の間とする」と規定されたものである。

今年度実施した2023年度国際文化研修（アジア次世代交流プログラム）¹は、2024年3月4日から3月15日まで12日間の現地（中国大連市）研修と、事前・事後各10日間のオンライン研修とを併せて、全体で32日間に亘るもので、本学（以下、JIU）国際人文学部国際文化学科の学生5名が参加した。

このように、日本での事前・事後オンライン研修期間は合計20日間と、全研修期間の6割以上を占めており、事前・事後オンライン研修のデザインは、研修全体の成否を左右する重要

な要素といえる。また、2021年度、2022年度は新型コロナウイルスによるパンデミックの影響を受け、本学は中国での海外研修を実施しなかったため、2023年度にJASSOによって本研修制度の見直しが実施されて以降、このような海外派遣の事前・事後のオンラインによる研修を取り入れた事業は、本研修が初めての試みとなった。

2. 研修概要

2.1 研修目的

2023年度「国際文化研修a/A（中国）」は以下の3点を実施の目的とした。

- ① 現地の学生との交流を通して相互理解を深めることに加え、外国社会や文化の実状を知り現在日本の置かれている立場について認識を深める。
- ② 現地の学生との交流、現地視察、ワークショップを通して当該地域について理解を深める。
- ③ 訪問先は日本語専攻の学部を持つ大学であり、日本語でのコミュニケーションも可能であるが、現地での視察やワークショップの中で中国語のコミュニケーションを実践し、中国語運用能力の向上を図る。

2.2 現地研修日程

表1 現地研修日程

日 程	内 容
3/4 (月)	出発 (成田空港→大連空港)、大連理工大学 (交流会／歓迎パーティー)
3/5 (火)	大連理工大学 (キャンパスツアー、チームによるワークショップ)
3/6 (水)	キャノン大連見学・大連理工大学開発区キャンパス見学
3/7 (木)	大連理工大学 (チームによるワークショップ)
3/8 (金)	大連理工大学 (チームによるワークショップ)
3/9 (土)	大連市内見学
3/10 (日)	大連市内グループ別自由行動
3/11 (月)	大連芸術学院 (キャンパスツアー、授業体験、交流会)
3/12 (火)	大連理工大学 (チームによるワークショップ)、大連SAP見学
3/13 (水)	旅順市内見学、大連パナソニック見学、大連アクセンチュア見学
3/14 (木)	大連理工大学 (授業体験)
3/15 (金)	帰国 (大連空港→成田空港)

筆者作成

3. 本プログラム事前準備

3.1 本プログラムの主な課題

本プログラムはJASSOの研修制度の見直しが実施されて以降、初めて企画、実施するものであり、本件で実施する事前・事後オンライン研修については、効果的な実施方法等の前例がなく、すべてゼロから企画することになった。また、事前・事後オンライン研修から、現地滞在中に至るまで、協定校の学生とのワークショップを実施するため、協定校と協力体制を構築することが非常に重要なことになる。本プログラムを企画する段階から、協定校である大連理工大学（以下、DUT）日本語学部の責任者、由志慎教授と本研修プログラムの概要、主な課題などについて数回に亘って打ち合わせをした。その際に議論された主な課題は以下のとおりである。

- ① 現地の学生とチームを組んで実地調査やワークショップを32日間に亘って行うため、異文化交流に関心のあるDUT側学生の募集
- ② 現地の学生とチームを組んでワークショップを実施するうえで、学生たちが同じ時間に集まりやすいよう、中国側の授業にオンラインで共同参加させてもらうために、授業を担当する教員の了承・協力を取り付けることが必要
- ③ 事前・事後オンライン研修のリモート授業用のツールの確認、現地研修期間中、学生たちが課題に取り組むための各校での教室の確保
- ④ グループによる活動が多いため、各グループでリーダーシップを発揮する学生の選出
- ⑤ 企業見学に関する企画及び見学企業側との日程、内容に関する調整

3.2 課題への対応に向けた準備

課題①と②については、由志慎教授が本研修の趣旨と合わせて、異文化コミュニケーションの授業を受ける日本語専攻3年生の学生（履修生17名）とJIU研修参加者5名の学生との共同ワークショップの実施を提案し、DUTの当該科目の担当教員である王沖教授の協力で実施した。

課題③について、本学が使用しているWebexを事前・事後研修のツールとして採用し、DUT側の教員、学生たちに当該ツールの利用環境を事前に準備してもらった。また、DUTの協力により、予定されたワークショップの時間に合わせて教室を確保することができた。

課題④については、参加学生の人数や特徴などに合わせて、次のように5つのグループを分けた。また、DUT側でグループごとにリーダーを1名選出し、チームによるワークショップにおけるリーダーシップの発揮を促してくれた。

表2 DUTとJIU学生グループ分け

グループ	人数
グループ①	5名 (DUT4名+ JIU1名)
グループ②	5名 (DUT4名+ JIU1名)
グループ③	4名 (DUT3名+ JIU1名)
グループ④	4名 (DUT3名+ JIU1名)
グループ⑤	4名 (DUT3名+ JIU1名)

筆者作成

課題⑤について、これも協定校の協力のもとで、大連に進出した大手日系合弁企業大連キャンノン、大連パナソニックと、ドイツ系のIT企業であるSAPと大連アクセンチュアを中心として、協定校の学生と一緒に企業見学を実施できた。

4. 事前オンライン研修

4.1 日本側参加者の事前研修

まず初回の事前研修として、海外研修に関する諸事項についてのオリエンテーションをオンラインで実施した。そして、参加者全員の役割分担を行い、日本からの参加学生チーム5名の代表、副代表、広報担当、交流会企画担当、総務担当を決めた。また、中国側の参加者に向けてJIUの紹介を行うためのプレゼンテーション資料の準備のための、作業分担について打ち合わせを実施した。

日本側メンバーによる2回目のオンライン研修は、各参加学生が作成したプレゼンテーション資料を持ち寄って、相互チェック、ブラッシュアップ等を行うとともに、完成した資料に基づいて、プレゼンテーションのリハーサルを実施した。

4.2 参加者全体のオンライン研修

参加者全体による事前研修として、DUT日本語専攻の3年生(17名)と、JIUの参加学生が一堂に会してのオンライン研修を実施した。初めに双方の学生が挨拶を交わし、DUTの王沖教授からDUTの紹介をしてもらった。

JIU側は両大学のこれまでの交流や関わりについて説明した後、5名の参加学生が事前に用意した大学紹介のプレゼンテーションを実施した。

その後、両大学の学生が、事前に振り分けられたグループに分かれて、それぞれのメンバーでミーティングを実施した。主な内容としては、自己紹介、興味や関心、中国の何に興味を持っているのか、反対に日本の何に興味を持っているのかといったことである。それから、日本側教員と中国側教員の事前の協議に基づいていくつか用意された調査テーマの例も参考にし

つつ、グループごとに1つずつトピックを挙げ、何について調べるのか、どのように調べるのかをグループで話し合い、教員のアドバイスも参考にしながら、調査内容のブラッシュアップを進めるという流れであった。しかしながら、この段階では、調査テーマについていくつかトピックは挙げているものの、1つに絞るまでには至っていないグループも見受けられた。



写真1 事前オンライン研修の様子

左：筆者撮影、右：大連理工大学より提供

4.3 グループ別でのワークショップ

全体の事前オンライン研修後、各グループで別々にグループごとのオンラインワークショップを実施した。ワークショップでは、“WeChat”という中国語圏で最大のシェアを有するSNSがツールとして併用された。全体での事前オンライン研修で議論された内容の続きということで、日中双方にとって興味のあるトピックを一つに絞り込む作業を進めた。そうして抽出されたトピックについて、中国側の情報、事実、意見等を整理するなかで、日本の学生の中には、日本との違いを知り、驚きや発見があったようである。現地での調査については、実際に現地の人のお話を聞く方が、理解が深まり、より信憑性の高い結果が得られる等の理由から、インタビューやアンケート等の実証的な調査方法が選択された。調査方法に応じて、調査対象や、質問の内容・形式等を検討した。

5. 現地研修

5.1 大連理工大学訪問

5.1.1 交流会

予定通り2024年3月4日に現地に到着した。日本側の参加学生は、到着直後はやや緊張気味の様子であったが、DUTの各グループのリーダーが空港まで出迎えに来てくれ、暖かく歓迎してくれたことから緊張がほぐれ、穏やかな雰囲気での研修をスタートできた。

ホテルにチェックイン後、協定校であるDUT主催の歓迎会及び日本語専攻の学生との交流会

が開催された。国際合作交流処、外国語学院の責任者から暖かい歓迎を受け、日本語学部の責任者由教授より研修のスケジュールや注意事項などの説明を受けた。交流会前半は、DUT側の学生が日本語で司会・進行を行い、企画したゲームをしながら、少人数のグループに分かれて、気軽に話し合う機会が設けられた。後半は、JIU交流会企画担当の学生が事前に準備した道具を使って、楽しくゲームを行うなどして、双方の学生も打ち解けることが出来たようである。

夜は歓迎パーティーが開催され、四川料理を囲みながら、終始和やかな雰囲気でご交歓することができた。JIUの参加学生も初日から様々な交流や発見があり、良い意味で刺激を受けたようである。

5.1.2 キャンパスツアー

滞在2日目の午前中は、各グループのリーダーの引率で、DUTのキャンパスツアーが実施され、DUT内の案内や紹介が行われた。

学生の感想として、大学の広さに驚くとともに、大学のキャンパス内には教室や食堂、コンビニがあるだけでなく、ほとんどの学生がキャンパス内に住んでいて、その学生たちが生活するために必要な、スーパーマーケットや学生寮、宅配ボックスなどのインフラが整っていることに、日本の大学との大きな違いを感じていた。

5.1.3 大連理工大学開発区キャンパス見学

滞在3日目の午後は、大連理工大学開発区キャンパスを訪問した。初めにDUT開発区キャンパス国際交流担当の責任者より大学紹介についてのプレゼンテーションを受けた後、海底探査ロボットやAIによる顔認証システムの研究室を見学した。学生も実際に顔認証システムの体験などを通じ、様々な発見や学びがあったものと思われる。

5.2 ワークショップ

5.2.1 第1回ワークショップ

滞在2日目の午後は、各チームに分かれてワークショップが実施された。事前のオンラインワークショップに続いての、現地での調査内容に関する打ち合わせとなった。

オンラインとは違い対面の話し合いとなったことから、学生同士が積極的に意見を交わすことができた。また、DUTの教員から自身の留学経験や、日本での生活経験の中で、驚いたことや、日中両国の違いを感じたことなど、いろいろな話題が紹介された。学生にも共感できる点があった一方、異なった視点等を与えることが出来たようであり、大変有意義なものとなった。

日程終了後、夜になってからは、放課後の過ごし方などについて情報を交換するなど、双方の学生同士が個人的に交流を深める機会にもなった。



写真2 チームによるワークショップの様子
筆者撮影

5.2.2 第2回ワークショップ

滞在4日目の午前、各グループでのワークショップで、現地調査に向けた準備を進めた。この段階では各グループともテーマの方向性は決まっており、調査手法や内容、日程、現地への移動方法といった内容について、教員のアドバイスも受けつつ具体的な計画を策定していた。午後には策定した調査計画を各グループが全体に発表し、さらなる改善に向けてグループ相互に意見交換を行った。

5.2.3 グループによる現地調査

滞在5日目は各グループで、それぞれ現地調査を行った。DUTの学内で学生に声をかけて、就職意識に関するインタビューをしたり、実際に大学の寮やスーパーへ行って日本との違いを調査したりしたグループや、日中両国の礼儀の相違点についての調査として、コンビニエンスストアに行って接客の仕方などを調査したグループもあった。

学生の感想として、中国社会の一部を実際に感じることができ、日本に居ては体験することができない貴重な体験となったという声や、地下鉄の改札を通る際に荷物検査があったことに驚いたなどの声があった。

5.3 企業見学

5.3.1 キヤノン大連見学

滞在3日目の午前中に、企業見学としてキヤノン大連を訪問した。はじめに会議室でキヤノンの会社説明、日本からの転勤者のキャリア紹介、キヤノン大連の技術の紹介等を受けた後、工場見学を行い、従業員のモチベーション維持や、品質意識を高める工夫などを伺うことができた。

また、学生の感想として、日本からの転勤者の話の中で、日本では意思決定はボトムアップであることに対し、中国ではトップダウンが一般的であるといった、日本と中国での仕事の進め方の違いについての内容に、強い印象を受けたようである。

5.3.2 SAP企業見学

滞在9日目の午後は、ドイツ系大手IT企業であるSAP社を訪問した。DUTの卒業生の社員から、現在の仕事や、新人の頃の話などについて説明を受けた。また、学生からの、SAPへの入社において求められる能力や資格、新入社員をどのような基準で選考しているかといった質問にも、丁寧に回答してもらえた。学生からは、SAP社の訪問を通じて、言語はツールの1つに過ぎず、言語学習だけでなく自分の専門分野プラス α が必要だということを学ぶことができたといった感想があった。

5.3.3 大連パナソニックと大連アクセンチュア見学

滞在10日目の午後は、企業訪問で、大手電機メーカーの大連パナソニックと、大手コンサルティングファームの大連アクセンチュアを見学した。大連パナソニックでは、パナソニック製品が使われているモデルルームを見学し、先進的な技術に触れることが出来た。

また、アクセンチュアの見学を通じて、生成AIの成長が著しい社会において、AIに代替されないビジネスマンとなるためには、どのような経験が必要となるのか、常に社会へのアンテナを巡らせることが大切である、といった問題意識を持ったようである。

5.4 大連・旅順市内見学、自由行動

5.4.1 大連市内見学

滞在6日目は、日本側の参加者で大連の市内見学を実施した。JIU教員が引率して、大連市内の中山広場、濱海路、北大橋、星海広場といった有名な歴史、文化スポットを訪問した。学生の感想として、中国の大連駅と日本の上野駅は作りが同じだと知って日本との繋がりが感じられたといった声があった。



写真3 大連市内見学

筆者撮影

5.4.2 旅順市内見学

滞在10日目の午前中は旅順を見学した。日露戦争の際の日本とロシアの会見所や、旅順博物館を訪問した。学生の感想としては、教科書やインターネットでは得られないような、歴史を実際に見て感じられるとても良い体験であり、今回のような体験が自分の中に蓄積され、いずれ必ず活かすことができると思うといった意見や、当時、中国でどのようなことが起こっていたのかを学び、過去を変えることはできないが、これからを担う社会の一員として、歴史を学ぶべきだと思ったという声があった。学生にとっては現地でしか得られない学びがあったと思われる。

5.4.3 グループ別自由行動

滞在7日目は自由行動日となり、各グループそれぞれが学生同士で様々な場所を訪れ、交流をさらに深めることができた。動物園やゲームセンターを訪れたグループもあり、動物園の広さに驚いたという声や、パンダを見られた喜びの声もあった。

5.5 大連芸術学院訪問

5.5.1 キャンパス見学

滞在8日目は、大連芸術学院を訪問した。国際教育学院院長と国際合作交流処の担当者の暖かい歓迎を受け、文化芸術管理学院、音楽学院、芸術デザイン学院、服飾学院等を見学した。各学院を見学する際に、院長が自ら学院の特色を説明し、主な施設を案内してくれた。学生の感想として、文化芸術管理学院では、歴史文化財を修復・修繕する修繕士の、職業としての地位の希少さや安定性について関心を持ったという声があった。また、服飾学院ではモデルの学生たちとランウェイを歩いたことが印象深かったという声があった。

5.5.2 「日中詩歌比較」講座

大連芸術学院の日本語専攻の学生と一緒に日中の詩歌に関する講座を受講した。日本の詩を中国人が、中国の詩を日本人が、それぞれ朗読し合うという体験を通じて、語学学習の上でも良い刺激を受けたようである。日本側の学生にとって中国語で唐詩の朗読をするのは初めてのチャレンジであったが、現地の学生が丁寧に中国語の発音を教えてくれたおかげで、全員が比較的良好なパフォーマンスで朗読することができた。

5.6 授業体験

5.6.1 日本語授業見学

滞在9日目の午前中は、大連理工大学の日本語の授業を見学した。この授業は、長年にわたり大連で日本語教育に従事してきたベテランの日本人教員による授業であった。学生からは、日本人教員が海外で実際に外国人に対して日本語を教える授業を受けることができ、とても貴重な体験だったという声や、これをきっかけに日本語教員を目指す学生も出てくると思うといった

感想があった。また、授業終了後、日本人教員との座談会を行い、教員からさまざまな経験やそこから学んだこと等を伺うことができた。



写真4 日本語授業見学

筆者撮影

5.6.2 異文化コミュニケーション授業体験

滞在11日目は大連理工大学の異文化コミュニケーションの授業を体験した。この日は元々、現地調査報告会と、夜に答礼パーティーが行われる予定であったが、途中で体調を崩した学生がいたため、現地調査報告会に代えて異文化コミュニケーションの授業の体験を行うこととし、答礼パーティーは中止となった。学生からは、異文化コミュニケーション授業の感想として、文化とは何か、自分とは異なる文化を持つ人とどのようにコミュニケーションをとっていくのかということを知り、国際大学に通っている自分たちにとって、この授業の内容はとても大切なことだと思ふといった声が寄せられた。

翌日に帰国で朝から移動となるため、この日の授業が現地での最後の集まりとなった。学生たちの中では、この日参加できなかった学生も含めて、お礼やお土産の交換などが行われたようである。

6. 事後オンライン研修

日本への帰国後、全員参加による事後オンライン研修及びグループごとの事後研修を実施した。全員参加による事後オンライン研修の初回は、DUTの学生と共同で現地調査発表会を行った。当初は大連での現地ワークショップの最終回で、各グループが調査結果の発表を行うという予定であったが、実施できなかったため、事後のオンライン研修の中で行ったものである。

各グループのテーマは、「中国大学生の就職意識調査」、「日中大学生の生活の相違」、「日中スーパーの相違」、「日中現役大学生の結婚観」、「日本と中国の食生活のスタイル」といったもので、いずれも実際にインタビューやアンケート等の実証的な調査を行って、学生たちが現

実の中国社会で見たり、感じたりしたことをまとめたものである。各グループともしっかりと調査を行っており、信頼性・蓋然性の高い結果を得られたようであり、学生ならではのユニークな視点が盛り込まれたものであった。単に外国の社会を見たり体験したりするだけでなく、一つのテーマについて共同で調査を行い、日中の相違点や共通点などについて深いディスカッションを行うことによって、DUTの学生とも有意義な交流ができたと評価できる。

JIUの学生には、調査結果にもとづいて、引き続き中国研修成果発表会の個人発表のためのプレゼンテーション資料を作成してもらうこととなった。

2回目の全員参加事後オンライン研修では、JIUとDUTの学生がそれぞれ作成したプレゼンテーション資料を持ち寄り、メンバー全員で、不足している内容や追加すべき事柄がないかについて議論し、提示された意見等を踏まえて、資料のブラッシュアップを行うとともに、中国研修成果発表会でのプレゼンテーションに向けて、各グループ内で発表順・発表の分量等の検討、調整を行った。

全員参加事後オンライン研修の最終回は、中国研修成果発表会であった。各グループが作成したプレゼンテーション資料を全員で共有し、順番に発表した。

表3 中国研修成果発表会

グループ	テーマ
グループ①	日中大学生の生活の相違
グループ②	中国大学生の就職率調査
グループ③	日中スーパーの相違
グループ④	日本と中国の食生活のスタイル
グループ⑤	日中の現役大学生の結婚観について

筆者作成

7. 学生へのアンケート結果から

今回の研修についてJASSOが定めたアンケートを行っており、学生の満足度等について調査している。

海外研修に関する満足度について10段階での評価は、中央値で7点以上となっており、概ね高い満足が得られているようである。

満足度については、国内では得られない良い経験や学びが出来たこと、語学力のアップ、学習へのモチベーション向上等の前向きなコメントがあった。一方、現状の語学力に自信がないことや、積極的に会話することが出来なかった等、自らの語学力が不十分と感じているコメントがあった。さらに今回体調を崩した学生もおり、健康管理についての反省のコメントもあった。このような事情はあったものの、受け入れ側が日本語専攻課程で、日本語能力が高

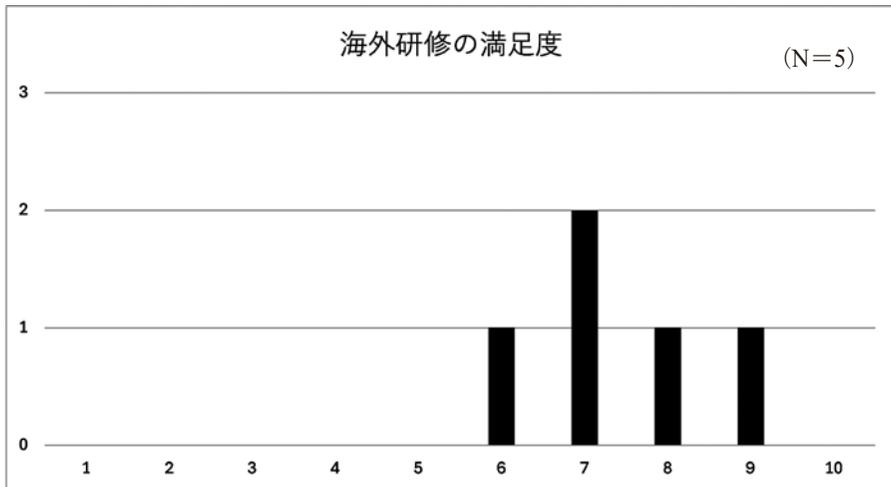


図1 海外研修の満足度

筆者作成

く、かつ手厚い支援を受けられたこともあって、学生の満足度は総合的に高いものになったと思われる。

また、奨学金として支給された金額についての質問では、8割以上の学生は十分と回答しており、さらに、奨学金がなくても留学したかとの質問に対しては、奨学金の有無にかかわらず留学したという回答がやや多かったものの、回答はばらついている。このことから、今回の海外研修に限っては、経済的な要素が必ずしも最も高いハードルとはなっていないという傾向が見て取れた。

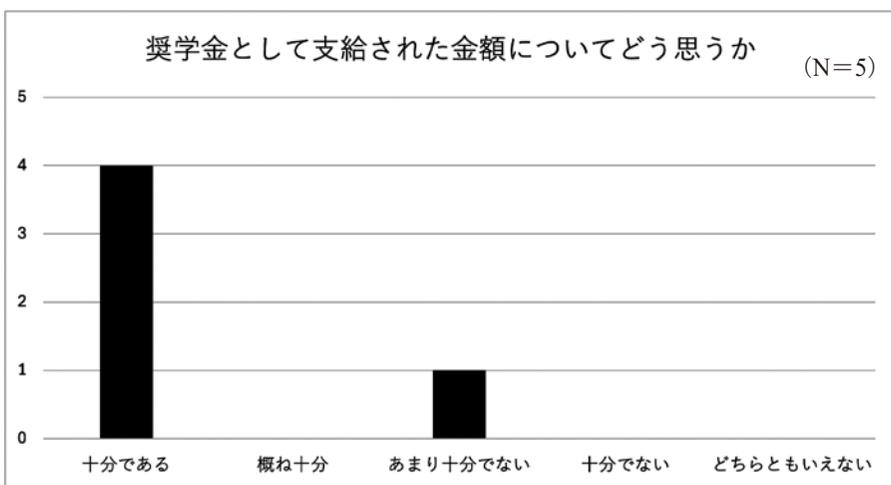


図2 奨学金として支給された金額について

筆者作成

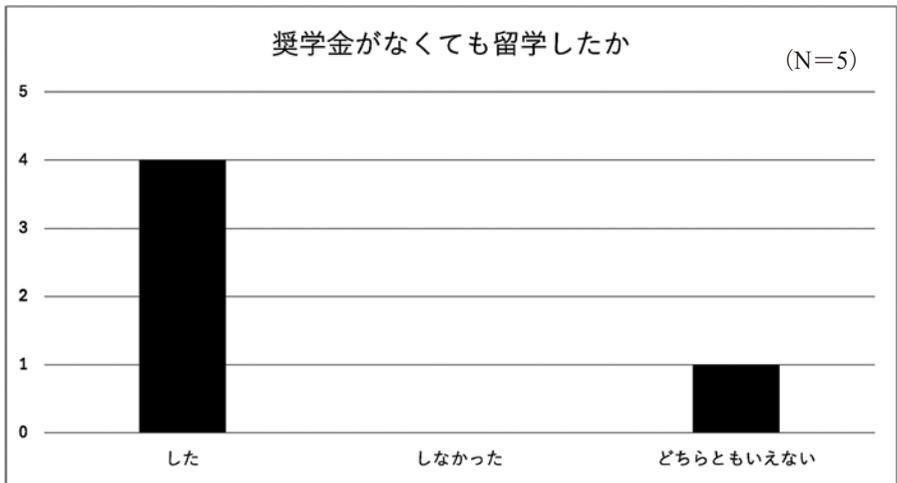


図3 奨学金がなくても留学生したかについて

筆者作成

今回の研修が、学業や就職活動に役立つかという質問についても、肯定的回答がやや多いものの、回答にはばらつきが見られる。これは、参加した学生がいずれも1年生、2年生であったことから、専門分野への理解が不足していることや、就職活動に対しても未だ明確なイメージを持っていないといったことによるものと思われる。

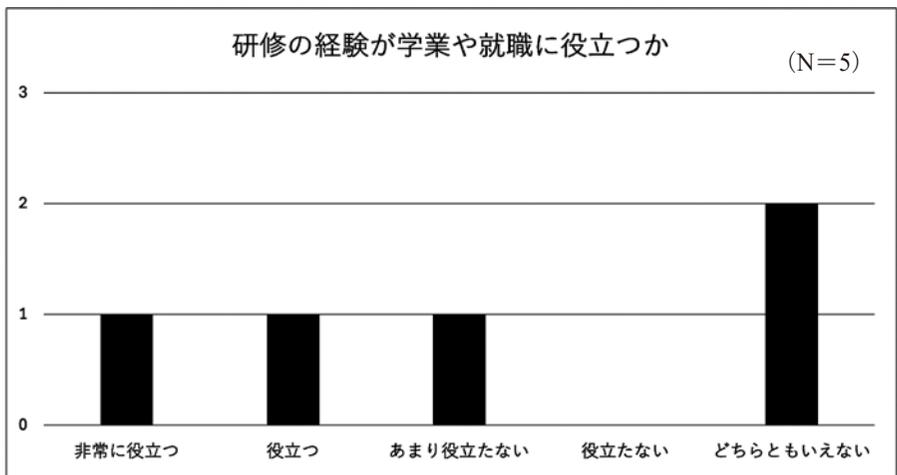


図4 研修の経験が学業や就職に役立つかについて

筆者作成

この研修を経て、より長期の留学をしたいかという質問に対しては8割以上の学生がそう思うと回答しており、今回の研修によって、何らかの肯定的な影響が及ぼされているものと思わ

れる。また、どちらともいえないという回答については、「より長期の留学」ではなく、短期の留学を多くしたいというコメントが付されており、留学そのものに対しては前向きな意思が示されているため、結果的にすべての学生に対して、留学へのモチベーションを喚起することができたものと思われる。

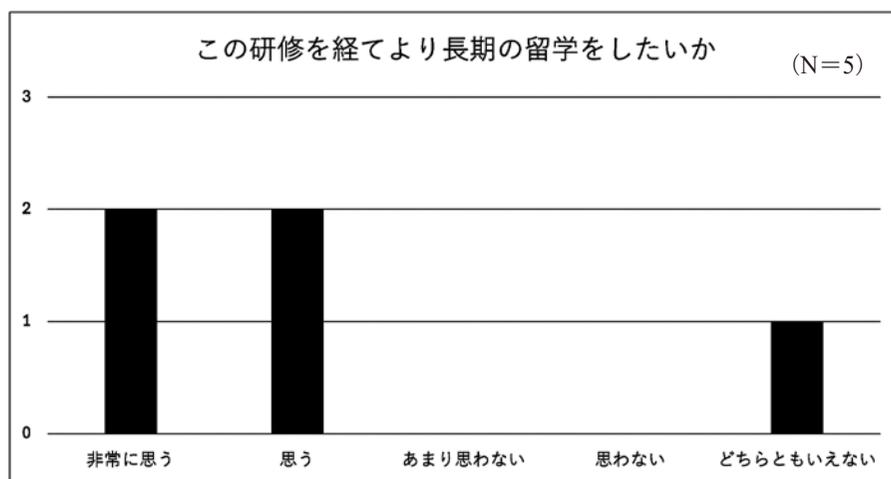


図5 この研修を経てより長期の留学をしたいかについて

筆者作成

8. 終わりに

今回の研修は、JASSOの海外研修として初めて、事前・事後のオンラインによる研修の導入を試み、あらかじめ研修先の大学の学生たちと交流やワークショップなどを行ったことで、現地ではより踏み込んだ形で、対面のワークショップや現地調査などの研修活動を行い、また学生同士もより深い交流ができたと思われる。帰国後のアンケートの中からも、学生たちの満足度や達成感の向上に、一定の寄与ができたものと考えられる。

特に、本研修においては、事前のオンライン研修から、現地でのワークショップ・調査、事後のオンライン研修と、日中の学生がそれぞれのグループで共通理解を持ちながら、オンラインから現地での対面へと、連続的にコミュニケーションを取ることができ、その結果、現地でもスムーズに協働しながらお互いの文化や社会について学び、様々な視点から議論や交流を深めることが出来た。

このように、本研修事業の結果は、短期の留学や海外派遣といった、比較的現地での滞在期間が短く、時間的に制約の多いプログラムであっても、事前事後のオンラインによるコミュニケーションの機会を活用することによって、高い研修効果を得ること出来るということを示すものと考えられる。

一方、今回の研修への参加者がいずれも学部1年生ないし2年生ということで、調査の設計

の仕方や進め方、アンケートやインタビューといった調査手法に関する知識が不足していたため、具体的な取り組みを計画するプロセスがややぎこちないものになったと思われる。このため、事前学習の段階で、調査方法に関する基礎的な内容を盛り込み、よりスムーズな研修となるよう促す必要があると考える。

また、研修期間中に体調を崩した学生が出て、一部のプログラムに不参加となり、また全体のスケジュールについても一部変更せざるを得ない状況となった。短期間とはいえ、外国での生活中で、気づかぬうちに疲労を蓄積させてしまったということも考えられる。事前の研修においても注意を喚起したところではあるが、学生の健康管理についての意識は若干希薄であったことも否めない。健康管理に限らず、海外渡航中の危機管理全般について、今後はより具体的な事例も合わせて紹介するなど、学生の意識を高めるよう働きかけることとしたい。

まだまだ改善の余地はあるものの、本研修では、DUTの学生や大連芸術学院の学生と多岐にわたる交流を実現できた。現地の学生たちと、皆でディスカッションをして考えを深めたり、協力して現地調査をしたりしたことは、参加した学生たちにとって、大変貴重な体験になったものと思われる。

また、全体で32日間に亘る今回の研修は、事前・事後オンライン研修の実施から、日中の学生グループによるワークショップ、現地での調査まで、協定校の関係者の皆様から多大な協力を得ることによって実現することができたものである。そして、今回の研修が実りあるものとなるためには、協定校の協力が鍵となっていることを改めて確認した。ご支援をいただいた協定校の関係者の皆様には、この場をお借りして心より御礼を申し上げたい。

【注】

- 1 2023年度国際文化研修（アジア次世代交流プログラム）は、JASSO2023年度海外留学支援制度（協定派遣）（タイプA）として採択されたプログラムである。なお、本研修は、「国際文化研修A」、「国際交流研修A・B・C」という科目（2単位）で、2023年度はWS（ウインターセッション）で開講された。筆者は科目担当者として、企画と引率を行なった。

【参考文献】

2023年度の「中国研修」～国際文化研修（海外）国際人文学部国際文化学科 城西国際大学 (<https://www.jiu.ac.jp/cultural/curriculum/detail/id=17628>)（閲覧日：2024年10月27日）